
原著論文

在宅看護実習における看護実践能力の修得状況
—計量テキスト分析による検討—

川上 祐子^a, 中村 康則^a, 任 和子^b, 向後 千春^c

**Learning Status of Nursing Competence in Home Care Nursing: An Investigation
through the Quantitative Text Analysis**

Yuko Kawakami^a, Yasunori Nakamura^a, Kazuko Nin^b, Chiharu Kogo^c

^a Graduate School of Human Sciences, Waseda University

^b Department of Human Health Sciences, Graduate School of Medicine, Kyoto University

^c Faculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : November 12, 2018 ; Accepted : May 22, 2019)

Abstract

The aim of this study was to extract the concepts of learning in home care nursing and clarify the acquisition of nursing competence by comparing the results with the model core curriculum for nursing education. We also investigated whether the learning concepts differed depending on the degree of independence in activities of daily living of the user. Qualitative and quantitative analyses were performed by applying an adjoining approach, with one method involving weighted text analysis, considering the practice report of nursing university students who completed their home care nursing. The following learning concepts were extracted: “Cooperation with other occupations,” “be physically close to the user,” “the family’s nursing strength,” “lessen the family’s anxiety/burden,” “time constraints,” “assessment,” “differences between the ward and a person’s home,” “equipment resource constraints,” “communication,” and “needs.” When we compared these results with the model core curriculum for nursing education, we found that although the learning concepts acquired through home care nursing capture the perspective of this curriculum, it was inferred that comprehensive understanding of community-based integrated care, assessment over time, and participation in care as a team member were difficult to achieve. Therefore, it is necessary to repeat the lessons while linking them to basic knowledge that the student has already learned, and consider the practice environment to enable the students to achieve comprehensive understanding, thereby, improving the competence of home care nursing in basic nursing education. The results suggest that differences in the degree of independence in activities of daily living of the user for whom the student was responsible did not excessively affect learning in home care nursing.

Key Words : basic nursing education, home care nursing, clinical practice, quantitative text analysis

^a 早稲田大学大学院人間科学研究科 (Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

^b 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 (Department of Human Health Sciences, Graduate School of Medicine, Kyoto University)

^c 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

1. はじめに

少子高齢化を背景に、病気や障害を抱えながら住み慣れた地域で、その人らしい生活を最期まで続けられるよう地域包括ケアシステムの構築が推進されている¹。これらの理由から、在宅ケアのニーズは高まり、看護師に求められる社会的役割は拡大している²。こうした社会的要請に対応するため、看護基礎教育における在宅看護論では統合分野に位置づけられ、在宅で提供する看護の理解、基礎的な技術の習得、多職種と協働する中での看護の役割を理解するとともに、統合的な看護実践能力の育成を目指している³。その一方で、在宅看護教育に関連した環境の整備は不十分で多くの課題がある⁴。まず、学生が行う看護技術実習の範囲や機会、患者の人権への配慮、医療安全確保のための取り組みが強化されたことにより限定されている⁵。このため、看護学生が受け持つ患者は、病態がある程度安定している場合が多く⁶、患者の立場になって考える機会や、患者を全人的あるいは生活者として捉える力が浅くなるのが危惧されている⁷。また、訪問看護実習の報告では、日常生活援助技術を学生が実践する機会が少ないこと⁸、介護状況の洞察力の無さや社会資源の知識不足のため、多職種連携の必要性に気付かない学生がいること⁹などが指摘されている。

看護系大学の学士課程では、看護系大学の急増に伴った教育水準の維持向上、および、卒業時の看護実践能力の学修目標が示された看護学教育モデル・コア・カリキュラム（以下、モデルコアカリキュラム）が2017年に策定された¹⁰。モデルコアカリキュラムは、看護実践能力の育成において臨地実習の充実を不可欠とし、医療施設以外の場での実習の重要性を強調している¹⁰。このモデルコアカリキュラムの照準に合わせて、在宅看護実習の教育体制を整備していくことは喫緊の課題である。そのため、モデルコアカリキュラムと現時点における看護実践能力の修得状況を比較検討することは、より効果的な実習を展開するために重要となる。しかし、モデルコアカリキュラムが導入されてまだ日が浅いこともあり、モデルコアカリキュラムと看護実践能力の修得状況を比較した研究は少ない。また、在宅看護実習に関する研究では、実習レポートなどのテキストデータを用いた質的研究が散見される^{11,12,13}。この理由として、在宅看護実習においては、多人数の学

生が多数の施設で分散して実習を行うため、一人の教員が全学生の学習状況を把握することは事実上困難である。そこで、これらの研究では、学生が学んだことを記述する実習レポートを対象として分析を行っていると推察される。そのため、本研究でも学習効果を客観的に把握するために実習レポートを対象として分析を行う。なお、質的研究にはトライアングレーションといった概念はあるものの、研究者間でのコード化・カテゴリー化の不一致や、手続きの再現性がしばしば問題となっている。そのため、質的研究におけるconfirmabilityやdependabilityが基準として重視されつつある¹⁴。そこで本研究は、実習レポートの分析に、樋口^{15,16}が提唱する計量テキスト分析の一手法である「接合アプローチ」の方法を用いる。なぜなら、質的な作業と量的な作業を交互的に、かつ、相乗的に実施する「接合アプローチ」を分析プロセスに適用することで、分析に対する信頼性・客観性を担保する分析方法だからである。

以上を背景として、本研究の目的は、計量テキスト分析の一手法である接合アプローチを用いて量的・質的な分析を行うことにより、在宅看護実習の学修概念を抽出し、モデルコアカリキュラムとの照合によって、看護実践能力の修得状況を以下のとおり明確にする。(1) 在宅看護実習で得られた学修概念は、在宅看護実習に対応するモデルコアカリキュラムの視座を捉えているか、(2) 担当利用者の日常生活自立度により、学生の学修概念は異なるかということを検討する。こうしたモデルコアカリキュラムと看護実践能力の修得状況の比較検討は、療養の場を医療機関から暮らしの場へトランジションがなされている現況において、地域全体を見据えたチーム医療や在宅看護など、看護実践能力向上の教育的示唆を得るための一助となるであろう。

2. 方法

2.1. 調査対象

A大学において、2016年度の在宅看護実習を終えた看護学生90人のうち、同意の得られた87人の実習レポートを分析対象とした。本研究は、岐阜医療科学大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：29-7）。

2.2. 調査手続き

A大学の在宅看護実習は3年次後期に実施された。2年次後期の在宅看護概論（2単位）、3年次前期の在宅看護方法（2単位）を修得の上、既習の知識と技術をもとに実習が行われた。また、実習開始前にはオリエンテーションを行い、実習目標・目的、実施方法などの事前指導を実施した。在宅看護実習は、「在宅看護において、自立支援のための看護の知識・技術・態度、および、地域包括ケアシステムを理解し、地域で活動する看護職者の役割を学ぶ」ことを目的とし、2週間（2単位）行われた。学生は看護過程を展開し、くわえて、訪問看護の同行によりフィジカルアセスメント、日常生活援助などの実施や見学を行った。学生は、在宅看護実習終了後、

「2週間の在宅看護実習を通じて、在宅ケアを実践するために必要と思われる知識・技術・態度について学んだこと」について、実習レポートを記述した。

なお、モデルコアカリキュラムとの照合には、「E. 多様な場における看護実践に必要な基本的知識」「F. 臨地実習」の大項目に着目し、在宅看護実習に該当する下位項目を共同研究者間で設定し、比較検討に用いた（表1）。

2.3. 使用ツール

計量テキスト分析には、樋口¹⁶が開発したKH Coder Version 3.Alpha. 08kを用いた。また、形態素解析エンジンにはMeCab Version 0.996を用いた。

表1 在宅看護実習に対応するモデルコアカリキュラム

在宅看護実習に対応するモデルコアカリキュラム			ねらい	
大項目	中項目	小項目		
E 多様な場における看護実践に必要な基本的知識	E-1 多様な場の特性に応じた看護	E-1-1 多様な場の特性	看護が提供される多様な場と生活の場の特性を学ぶ。	
		E-1-2 多様な場に応じた看護実践	多様な場に応じた看護実践について学ぶ。	
	E-2 地域包括ケアにおける看護実践	E-2-1 地域包括ケアと看護	E-2-1-1	様々な発達段階、健康レベル、生活の場にある人々が、住み慣れた地域で暮らしを続けることができるようにするための、サービス提供機関について学ぶ。
			E-2-1-2	保健・医療・福祉のケアニーズをもつ人々が、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるようにするために、地域包括ケアにおいて多様な専門職及び地域の人々と連携・協働し、看護の役割を發揮する能力を身に付ける。
		E-2-2 地域包括ケアにおける看護の役割	E-2-2-1	「A 看護系人材（看護職）として求められる基本的な資質・能力」を常に意識しながら、臨地実習を行う。
			E-2-2-2	人々の治療や生活の場とそれらを支える社会資源の実際を知り、人々と関係性を築きながら、看護学の知識・技術・態度を統合し、実践へ適用する能力を身に付ける。
F 臨地実習	F-1 臨地実習における学修	F-1-1 臨地実習における学修	多様な場で多様なニーズを持つケアの受け手に対して適切なケアを提供するための基礎的能力を身に付ける。また、看護過程におけるアセスメントの重要性と看護過程が循環する一連のプロセスであることを学ぶ。	
		F-1-2 臨地実習における学修の在り方（特徴）	チームの一員として、チームメンバーの指導を受けながらケアに参画すること、また実習グループメンバーによる協働学修を通じて、多様な場で多様なニーズを持つ人々に対応するための基礎的能力を育成する。また、チームの一員として活動できる態度を養う。	
	F-2 ケアへの参画	F-2-1 看護過程に基づくケアの実践		
		F-2-3 チームの一員としてのケア参画		

2.4. 接合アプローチ

接合アプローチとは、テキストデータを2つの段階に分け分析する手法である。接合アプローチの第1段階としては、correlationalアプローチ¹⁷にならない、多変量解析を用いることで、分析者のもつ理論や問題意識の影響を極力受けない形でデータを要約・提示する。この段階を踏むことで、分析者の理論や仮説にとって都合のよい分析がされてしまうことを防ぐことができる。つぎに、接合アプローチの第2段階は、dictionary-basedアプローチ¹⁸にならない、コーディングルールを作成することで、明示的に理論仮説の検証や問題意識の追求を行う。その際、第1段階で示された多変量解析による客観的なデータから、どの部分、あるいはどの側面がコーディングルールによって取り上げられたのかを示すことができれば、恣意的になりがちなdictionary-basedアプローチの分析を第三者が把握できるようになる。つまりは、分析の信頼性・客観性を向上させることができる分析方法である。

2.5. 分析方法

本研究では、樋口^{15,16}が提唱する計量テキスト分析の一手法である「接合アプローチ」の手順^{15,16}に従い、分析を実施した。

分析の第1段階としては、階層的クラスター分析を行った。階層的クラスター分析は、出現パターンの似通った語の組み合わせにどのようなものがあつたのかを探索することができることから、在宅看護の実習レポートがどのような学修概念で構成されているのかを明示する。第2段階では、コーディングルールを作成した。第1段階で得られた学修概念をもとにコーディングルールを作成した上で、実習レ

ポートにおける学修概念の出現率が「担当利用者の日常生活自立度」で差が生じるか否かについて、カイ二乗検定を用いて検討した。

3. 結果

3.1. 在宅看護実習レポートの基本統計量

分析の対象とした在宅看護実習レポート (N=87) の総文字数は74,563字であり、文の総数は1,114文であった。また、一人あたりのレポートの平均文字数は857.0字 (SD=169.13) であり、文の平均数は12.8文 (SD=3.64) であった。総抽出語数は44,982語 (うち分析に使用するものは13,340語) であり、異なり語数は2,573語 (うち分析に使用するものは1,772語) であった。なお、本研究では、抽出語として自立語のみを対象としており、付属語は対象としていない。

レポートに登場する上位150語の出現頻度と、総抽出語数に対する出現頻度の累計比率をカバー率としたパレート図を図1に示す。150語目の出現頻度は17となり、カバー率は63.5%であった。

3.2. 在宅看護実習レポートで言及された学修概念

在宅看護実習レポート (N=87) を分析対象として、実習レポートがどのような学修概念で構成されているのかを明らかにするため、階層的クラスター分析を行った。その際は、対象とする品詞を名詞(サ変名詞含む)、動詞(形容動詞含む)、形容詞とした。なお、動詞、形容動詞、形容詞には活用形が存在するが、これらは全て同一の単語としてカウントした。たとえば、動詞「行う」の活用形としては、「行う」という基本形の他に、「行っ(連用タ接続)」「行い(連用形)」「行わ(未然形)」「行お(未然ウ接続)」が存在するが、これらはすべて「行う」としてカウ

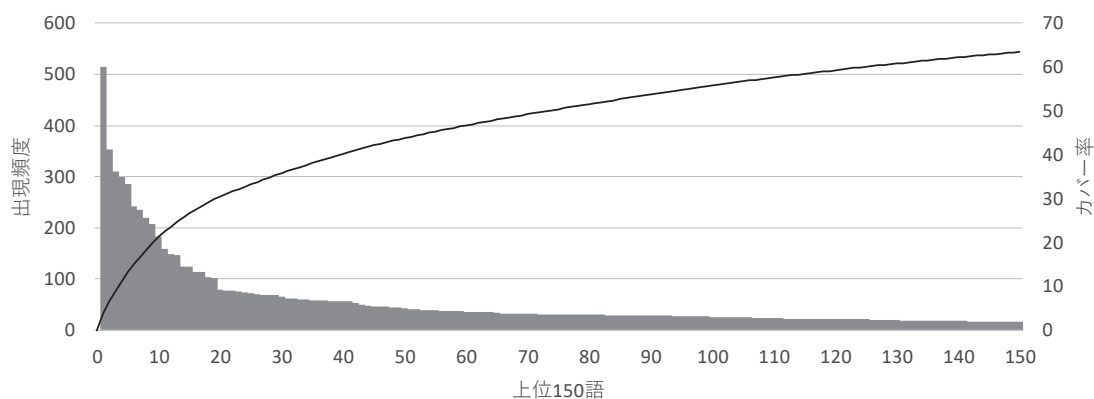


図1 上位150語の出現頻度とカバー率

ントした。また、単語の最小出現数を30、クラスター化法をWard法、クラスター併合時の距離係数の算出にはJaccard法を採用した。なお、単語の最小出現数を30とした理由であるが、樋口 (2014)¹⁶は多くの語を分析に用いると結果の確認が困難となるため、抽出語を選択する必要があると述べており、KH Coderでは出力される語の数が75前後になるような、きりのよい数値 (5の倍数) が「最小出現数」として自動的に入力されるようになっている。そのため、本研究では、この方針に従い抽出語の最小出現数を30に設定した。抽出語の最小出現数を30とした場合、上位82語が分析の対象となり、これらの総出現頻度は6,940であった。総抽出語数に対する総出現頻度の割合 (カバー率) は52.0%であった。

クラスター併合時の距離係数の変化を確認したところ、クラスター数が18から24にかけて、総じて滑らかに変化していた。樋口 (2014)¹⁶は、階層的クラスター分析におけるクラスター数の採択基準として、クラスター併合時の距離係数の変化を読み取った上で、距離係数が急に変化するところを避け、滑らかに変化するところのクラスター数を候補とし、その中で結果を解釈しやすいクラスター数を採択する指針に言及している。そのため、クラスター数が18から24の範囲の中で、分析結果の解釈のしやすさを判断した結果、クラスター数を20として階層的クラスター分析を実施した (表2)。以下、個々のクラスターについて概観する。

まず第1クラスターは「職種」「連携」、第2クラスターは「訪問」「看護師」「役割」などが集まっていた。これらの抽出語が、実習レポートにおいてどのような文脈で使用されていたかを確認するため、Keyword In Context (以下、KWIC) 分析を行ったところ、「訪問介護、ディサービスなど、その利用者さんのところへ訪問に行かない時でも異常がないか把握できるように、職種の連携が重要だと思った」「少しでも安全・安楽に生活を送れるように、訪問看護師が他職種と対象・家族をつなぐ役割があると学んだ」などの文脈で用いられていた。そのため、これらのクラスターは「他職種との連携」について言及した学修概念と見て取れる。

つぎに、第3クラスターは「利用者」、第13クラスターは「生活」「環境」、第14クラスターは「対象者」「本人」「合わせる」などの抽出語で構成されていた。

これらの語は「利用者様の意思を最大限に尊重して、利用者様が最も良い環境でいられるようサポートすることが大切だと改めて学んだ」「訪問看護の役割として、対象者が在宅で生活するために、対象者にあわせたケアを行っていくことが重要であると学んだ」などといった形で用いられていた。このクラスターは、看護の対象を正しく把握し寄り添うことについての記述が多かったため、「利用者への寄り添い」に関して言及した学修概念と見て取れる。

第4クラスターは「介護」「家族」「考える」「感じる」などの抽出語で構成されていた。KWIC分析により使用文脈を確認したところ、「訪問看護の対象は在宅で生活している方なので、介護している家族の介護力も考える必要がある」「在宅における主介護者は家族であるため、対象が安全に生活するためには家族の介護力の有無が重要であると感じる」などのように、家族の介護力に着目した記述が多く見られた。そのため、このクラスターは「家族の介護力」について言及した学修概念と見て取れる。

第5クラスターは「不安」「負担」「軽減」などが集まっていた。これらの語は、KWIC分析によれば「看護師は訪問時に適切な指示や援助を行うことで介護者の不安や負担感を軽減できると考えられる」「家族の介護負担の軽減も訪問看護師の大切な役割であると考え」などのように、家族の負担軽減といった形で使用していた。そのため、このクラスターは「家族の不安・負担の軽減」について言及した学修概念と見て取れる。

第6クラスターは「時間」「限る」などが集まっていた。KWIC分析によれば「限られた時間の中でケアを実施することの難しさを実感することができた」「在宅では限られた時間の中で必要な処置、緊急な状況にも対応する必要がある、単独で実践できる技術を修得する必要があると思う」などの文脈で使用していた。これらは、在宅看護の時間的な制約といった形で使用していたため、このクラスターは「時間的な制約」について言及した学修概念と見て取れる。

第8クラスターは「アセスメント」「計画」、第9クラスターは「状態」「観察」などが集まっていた。KWIC分析によれば「看護師の視点から根拠をもってアセスメントし、対象に合わせた計画を考える必要があると思った」などのように、看護計画やアセ

表2 レポート中に頻出していた語のクラスター分析

第1クラスター		第9クラスター		第15クラスター	
連携	56	状態	76	精神	39
職種	43	観察	31	疾患	30
第2クラスター		第10クラスター		第16クラスター	
訪問	353	医療	58	援助	77
ケア	243	管理	35	関係	45
看護師	207	処置	34	物品	41
行う	184	第11クラスター		方法	33
役割	56	病棟	69	指導	30
第3クラスター		第12クラスター		第17クラスター	
利用者	299	様々	57	療養者	104
様	59	患者	68	自分	53
第4クラスター		第13クラスター		重要	56
家族	514	生活	285	技術	46
介護	310	療養	101	見る	44
考える	235	環境	72	コミュニケーション	39
感じる	159	自宅	60	聞く	32
学ぶ	148	安心	31	第18クラスター	
実習	146	第14クラスター		ニーズ	62
思う	124	本人	49	関わる	62
大切	113	対象者	48	知る	38
第5クラスター		大きい	35	持つ	31
負担	78	理解	35	第19クラスター	
不安	59	支える	33	情報	79
軽減	40	思い	31	提供	74
第6クラスター		合わせる	31	支援	60
時間	113	目	31	サービス	47
限る	32	第15クラスター		第20クラスター	
第7クラスター		本人		多い	71
実施	66	対象者		人	68
足	31	大きい		利用	37
第8クラスター		理解		高齢	30
対象	125	支える			
アセスメント	35	思い			
計画	30	合わせる			
		目			

数値はそれぞれの語の出現回数

メントの文脈で用いられていた。そのため、これらは「アセスメント」を表した学修概念と見て取れる。

第11クラスターは「病院」「病棟」「違う」、第12クラスターは「家庭」「異なる」などが集まっていた。KWIC分析によれば「病棟と在宅というケアする場が異なることで介入の仕方が大きく違ってくることがわかった」などのように、病棟と在宅の違いについて着目していた。そのため、このクラスターは「病

棟と在宅の違い」について言及した学修概念と見て取れる。

また、第16クラスターは「物品」「方法」などが集まっていた。KWIC分析により使用文脈を確認したところ、訪問看護では「病棟のように必要な物品がそろっていないため、自宅にある限られたもので、工夫しながら援助に役立てるなどの方法が必要だと思った」など、物品資源の制約に着目していた。そ

表3 在宅看護実習レポートで言及されている学修概念

ID	概念名	クラスター	主なキーワード
1	他職種との連携	1, 2	職種, 連携, 訪問, 看護師, 役割
2	利用者への寄り添い	3, 13, 14	利用者, 対象者, 本人, 生活, 環境, 合わせる
3	家族の介護力	4	介護, 家族, 考える, 感じる
4	家族の不安・負担の軽減	5	不安, 負担, 軽減
5	時間的な制約	6	時間, 限る
6	アセスメント	8, 9	アセスメント, 計画, 状態, 観察
7	病棟と在宅の違い	11, 12	病院, 病棟, 家庭, 違う, 異なる
8	物品資源の制約	16	物品, 方法
9	コミュニケーション	17	コミュニケーション, 聞く, 見る
10	ニーズ	18	ニーズ, 知る

のため、このクラスターは「物品資源の制約」に言及した学修概念と見て取れる。

第17クラスターは「コミュニケーション」「聞く」「見る」などのように、コミュニケーションの必要性について論じる文脈で使用されていた。KWIC分析によれば「相手の話を傾聴し、状態が変化していないかなどの観察をするコミュニケーション技術を身につけていかなければならないと感じた」などで使用されていた。そのため、このクラスターは「コミュニケーション」を表す学修概念と見て取れる。

つぎに、第18クラスターは「ニーズ」「知る」などが集まっていた。KWIC分析によれば、これらの抽出語は「適切な援助を行うために、利用者のニーズや家族のニーズを知ることが大切だと思った」などの文脈で使用されていた。そのため、このクラスターは「ニーズ」に関する学修概念と見て取れる。

なお、抽出された20クラスターのうち、モデルコアカリキュラムに関連すると考えられる15クラスター（第1・2・3・4・5・6・8・9・11・12・13・14・16・17・18）を分析の対象とした。これらの15クラスターのうち、概念の重複が見られた5クラスター（第2・9・12・13・14）を統合したところ、在宅看護実習レポートには10種の学修概念が言及されていると解釈できた。その結果を表3に示す。

3.3. 学生の学修概念のコード化

接合アプローチの第2段階として、コーディングルールを作成した。コーディングとは、たとえば、『情報』と『探す』の2語が近くに出現していれば、その文章に『調べ物』というコードを与えること」といったコーディングルールを作成し、そのルールに沿ってそれぞれの文章にコードを付与していく作業である。この作業を行うことで、「調べ物」とい

うコードが付与された文章、すなわち「調べ物」という主題に言及した文章の数・割合を調べることができる¹⁹。

本研究におけるコーディングルールは、在宅看護実習のレポートにおいて、学生が言及した10概念を対象に作成した。たとえば、コード名「他職種との連携」のコーディングルールは「職種 or 機関 or チーム or 連携」とした。これは、実習レポート中に「職種」「機関」「チーム」「連携」のいずれかの語が存在していた場合に、「他職種との連携」という学修概念が言及されたと判断し、「他職種との連携」というコードが付与されることを意味する。また、コード名「時間的な制約」のコーディングルールは「時間 and (短 or 短い or 限られた or 決められた)」としているが、これは「時間」という語と、「短」「短い」「限られた」「決められた」のいずれかの語が同時に出現した場合にコードが付与されることを意味する。なお、両端をシングルクォート文字「」で囲った語は、形態素解析により語が分離されることを防止する意味で用いている。たとえば、「利用者」は、形態素解析により「利用」と「者」に分離されてしまうが、これでは「利用者」という本来の意味に沿って分析することができない。そのため、これをシングルクォート文字で囲むことで、「利用者」という本来の意味で語を認識させることができるようになる。

なお、KH Coderのコーディング機能は、分析対象とする文章に複数のコーディングルールが当てはまる場合、重複してコードを付与する¹⁶。たとえば、ある学生が書いたレポートの中に、「他職種との連携」と「時間的な制約」のコーディングルールが同時に当てはまる場合は、そのレポートに「他職種との連携」と「時間的な制約」の両コードを付与する。

3.4. 担当利用者の日常生活自立度による比較

この節では、担当利用者の日常生活自立度をランク別に見たとき、コード化した10種類の学修概念が、どのランクに多く出現しているかを比較する。担当利用者の日常生活自立度のランクは、生活自立（ランクJ）の利用者を担当した学生を「J群（n=13）」、準寝たきり（ランクA）の利用者を担当した学生を「A群（n=27）」、寝たきり（ランクB）の利用者を担当した学生を「B群（n=16）」、寝たきり（ランクC）の利用者を担当した学生を「C群（n=31）」とし、計4群に分割した。このランク分けに基づき、基礎的な集計結果として、10種類の学修概念の出現数および出現率を、日常生活自立度ランク別に示したものが図2となる。それぞれの日常生活自立度ランクの総頻度は、ランクJが166、ランクAが377、ランクBが176、ランクCが395であった。そのため、図2で示した出現率は、各出現数をランクごとの総頻度で割った数値となる。

その上で、日常生活自立度ランクごとにおける学

修概念の出現数の違いを検討するため、それぞれの学修概念について、個別に χ^2 検定を実施した。というのも、前節で述べたように、KH Coderのコーディング機能では、一つの文章に対し複数の学修概念が割り当てられることがある。このため、10種類の学修概念のうち、いずれか一つに限定して文章を分類することができない。つまり、KH Coderのコーディング機能は、一つの学修概念への排他的な分類ができないので、10種類の学修概念×4ランクのクロス集計という形ではなく、各概念について別々に出現数の違いを検討する必要があった。

この検討は、表4、表5に示すような形式で行った。10学修概念すべてについて検討したが、ランク別に有意な差がみられた2概念のみを表4、表5に示している。

まず、表4の学修概念「物品資源の節約」は、担当利用者の日常生活自立度により、概念の出現率に有意差がみられた（ $\chi^2(3) = 15.260, p < .01$ ）。表4に対して、調整済みの標準化残差分析を実施した

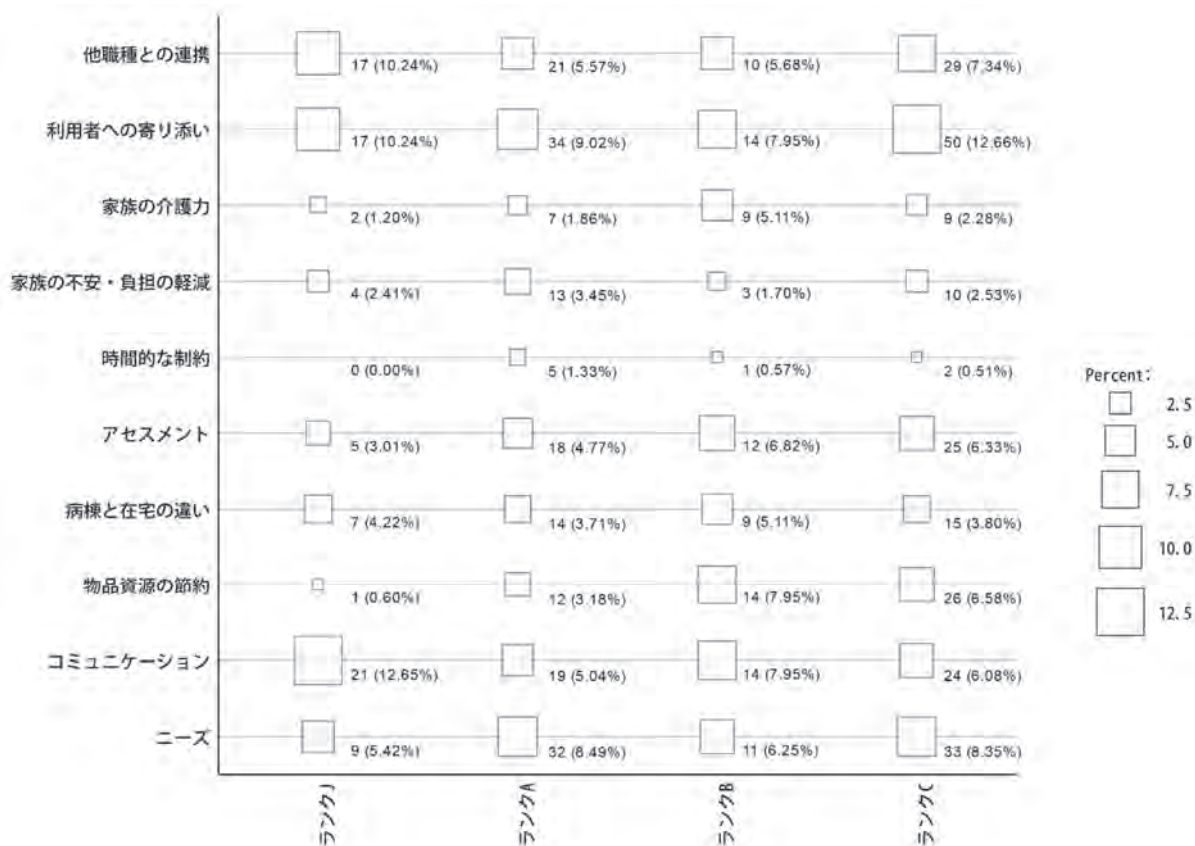


図2 在宅看護実習レポートに登場する学修概念の出現数と出現率

注1) 数値は各概念の出現数を示す。

注2) カッコ内の数値は出現率（各出現数をランクの総頻度で割った数値）を示す。

注3) 矩形の大きさ（Percent）は出現率を示す（注2と同じ）。

表4 「物品資源の節約」の頻度

ランク	出現頻度	その他の頻度
ランク J	1	165
ランク A	12	365
ランク B	14	162
ランク C	26	369

表5 「コミュニケーション」の頻度

ランク	出現頻度	その他の頻度
ランク J	21	145
ランク A	19	358
ランク B	14	162
ランク C	24	371

結果、B群とC群が「物品資源の節約」について有意に多く言及しており（B群； $p<.05$ ，C群； $p<.05$ ），また、J群が「物品資源の節約」について有意に少なく言及していた（ $p<.05$ ）。

つぎに、表5の学修概念「コミュニケーション」に関しては、担当利用者の日常生活自立度により、概念の出現率に有意差がみられた（ $\chi^2(3)=11.129$ ， $p<.05$ ）。表5に対して、調整済みの標準化残差分析を実施した結果、J群が有意に多く言及していた（ $p<.01$ ）。

一方で、上記以外の学修概念「他職種との連携」「利用者への寄り添い」「家族の介護力」「家族の不安・負担の軽減」「時間的な制約」「アセスメント」「病棟と在宅の違い」「ニーズ」には、担当した利用者の日常生活自立度により、概念出現率に差が見られなかった。

以上を概観すれば、学修概念「物品資源の節約」は、日常生活自立度が低い利用者を担当した学生（B群、C群）が多く言及していた。また、学修概念「コミュニケーション」は、日常生活自立度が高い利用者を担当した学生（J群）が多く言及していた。

4. 考察

計量テキスト分析により生成された、在宅看護実習で得られた学修概念は、「他職種との連携」「利用

者への寄り添い」「家族の介護力」「家族の不安・負担の軽減」「時間的な制約」「アセスメント」「病棟と在宅の違い」「物品資源の節約」「コミュニケーション」「ニーズ」であった。以下、(1) 在宅看護実習で得られた学修概念は、在宅看護実習に対応するモデルコアカリキュラムの視座を捉えているか、(2) 担当利用者の日常生活自立度により、学生の学修概念は異なるか。

4.1. 在宅看護実習で得られた学修概念は、在宅看護実習に対応するモデルコアカリキュラムの視座を捉えているか

在宅看護実習で得られた学修概念をモデルコアカリキュラムと照合することにより、学士課程の修得の指標となる看護実践能力の修得状況を評価することが可能となる。ただし、モデルコアカリキュラムは4年間を通して学際的に修得されるものであるため、モデルコアカリキュラム全体と比較することは困難である。そこで、在宅看護実習に対応するものを共同研究者間で選別し、それらを本研究で得られた学修概念と比較することで、在宅看護実習がモデルコアカリキュラムの視座を捉えているかを考察する。

表6は、選別したモデルコアカリキュラムと本研究で得られた学修概念をまとめたものである。これらを概観すると、「F-2-3. チームの一員としてのケア参画」以外の小項目に、抽出した10概念が全て対応していることが見て取れる。このことから、療養者とその家族への看護が病院以外の訪問看護ステーションや、暮らしの場で提供されることについて、学生の理解が得られたものと考えられる。多様な場の看護では、様々なライフサイクル、健康レベルにある療養者のニーズに対し、多角的なアセスメントが重要であり、多職種との連携・協働が不可欠であることを修得したと推察される。しかし、KWIC分析により関連する文脈を確認すれば、医師、理学療法士、ケアマネージャーとの多職種連携に関する記述は見られたものの、それらを地域包括ケアとして捉えることや、訪問看護ステーション以外の在宅ケア機関、介護保険に関連するケアサービスに関する記述は極めて少なかった。これは、地域のケアシステムやケアマネジメントの理解が不十分であったと推察され、樋口⁹、野村ら¹²の研究結果と一致する。

表6 在宅看護実習に対応するモデルコアカリキュラムと学修概念

在宅看護実習に対応するモデルコアカリキュラム 小項目	実習レポートから抽出した学修概念
E-1-1 多様な場の特性	時間的な制約, 病棟と在宅の違い
E-1-2 多様な場に応じた看護実践	他職種との連携, 病棟と在宅の違い, 物品資源の制約
E-2-1 地域包括ケアと看護	他職種との連携, アセスメント
E-2-2 地域包括ケアにおける看護の役割	他職種との連携, 利用者への寄り添い, 家族の介護力, 家族の不安・負担の軽減, アセスメント, 物品資源の制約, ニーズ,
F-1-1 臨地実習における学修	他職種との連携, 時間的な制約, アセスメント, コミュニケーション
F-1-2 臨地実習における学修の在り方 (特徴)	時間的な制約, アセスメント
F-2-1 看護過程に基づくケアの実践	アセスメント, ニーズ
F-2-3 チームの一員としてのケア参画	なし

学生の修得状況は、地域包括ケアの総合的理解にまで達しているとは言い難く、認識レベルに留まっていたといえよう。この理由として、学生の担当する利用者の特徴には、在宅療養期間が数ヶ月以上を経過し、すでに必要な社会資源を活用され、比較的安定した療養生活を送られていたことが挙げられる。なぜなら、担当利用者の週1～2回の訪問看護の同行からは、断片的な現状を捉えた学生の記述が散見され、学生は在宅療養に至った経緯を踏まえながら、経時的なアセスメントを行うことが困難であったと思われる。これらは、先に述べた任⁷の報告と本研究の結果が一致するものである。ただし、KWIC分析からは、「在宅で生活するために、対象者にあわせたケアを行っていくことが重要」と、在宅で生活されている対象者の看護を体験することで、患者を生活者と捉える力が培われているといえる。また、修得状況を補完するには、在宅看護論の授業や実習指導の際、多職種連携は地域包括ケアシステムの構築を意味するものとし、学生が包括的に捉えられるよう、既習の基礎知識と関連付けながら繰り返し教授していくことが必要である。

つぎに、「F-1-1. 臨地実習における学修」および「F-1-2. 臨地実習における学修の在り方 (特徴)」では、訪問看護師の看護技術を目の当たりにし、安全・安楽な看護を提供するために、知識の修得と看

護技術の質の向上が課題であることを見出している。また、「F-2-1. 看護過程に基づくケアの実践」では、多様な場で多様なニーズを持つケアの受け手に対して、アセスメントの重要性を再認識したと示唆される。その一方で、「F-2-3. チームの一員としてのケア参画」に対応する学修概念が見られなかった。これは、カンファレンスで意見を表明できたとしても、チームの一員としてケアに参画し、チームにおける自身の役割を自覚することまでは難しかったと推測される。この理由として、訪問看護実習では、看護実践を行う機会が非常に限られていたことが要因であろう。これは、前述した御田村ら8の報告を支持したものである。訪問看護サービスには、滞在時間や訪問回数に制限がみられる。さらに、実習施設による学生の受け入れ体制、利用者の協力状況などにより、学生指導に十分な時間をかけられないという実情も影響を及ぼしている。

以上のように、在宅看護実習で得られた学修概念からは、地域包括ケアの総合的理解、経時的なアセスメント、チームの一員としてケアに参画することは困難であったため、学生が包括的に捉えられるよう、既習の基礎知識と関連付けながら繰り返し教授していくことや、実習環境の検討も必要となるだろう。

4.2. 担当利用者の日常生活自立度により、学生の学修概念は異なるか

学修概念「物品資源の節約」は、日常生活自立度が低い（ランクB・C群）利用者を担当した学生が多く言及していた。その一方で、学修概念「コミュニケーション」は、日常生活自立度が高い（ランクJ群）利用者を担当した学生が多く言及していた結果となった。

「障害高齢者の日常生活自立度（寝たきり度）判定基準」とは、在宅の場における日常生活の自立の程度を評価するものである。ランクJは「生活自立」、ランクAは「準寝たきり」、ランクBとランクCは「寝たきり」に分類される。すなわち、「寝たきり」に該当するランクBとランクCは、障害の程度も重く、医療処置や看護ケアを必要とすることが多いとされる。ランクB、ランクCの利用者への訪問看護に同行した学生は、療養者が購入した物品、あるいは健康保険制度の診療報酬のうち制約のある物品を用いて看護ケアを行っている場面に遭遇していると推察される。そのため、物品には資源があることを認識したと思われる。医療機関では設備が整備され、物品などの資源が豊富に揃っているものの、在宅ではガーゼやカテーテルなどの滅菌用具、オムツなどのケア物品を十分に揃えることが対象者への経済的な負担を増大させることになる。よって、療養者とその家族の負担を軽減させるためにも、物品使用には工夫や節約する必要性を学修したと考えられる。このことから、学生は「物品資源の節約」に多く言及したと示唆される。しかし、ランクJの利用者は日常生活がほぼ自立していることから、医療処置やケアよりも一般状態の観察に留まっていることが多く見られた。このような対象者の場合には、意図的にコミュニケーションを図り、病状や生活の変化を捉え、必要に応じて支援を検討することが求められる。こうしたコミュニケーションを中心とした訪問看護の場面に遭遇した学生は、「コミュニケーション」に多く言及したと捉えることができる。

また、「他職種との連携」「利用者への寄り添い」「家族の介護力」「家族の不安・負担の軽減」「時間的な制約」「アセスメント」「病棟と在宅の違い」「ニーズ」の学修概念には差が見られなかった。これらは、在宅看護の役割として必要不可欠な概念であるが、日常生活自立度のランク分類によって、学生の学びに

格差が見られなかったと推察される。このようなことから、「物品資源の節約」「コミュニケーション」を除き、訪問看護ステーションの実習施設において、学生が担当する利用者の日常生活自立度の違いは、在宅看護の修得状況に過大な影響を及ぼしていないことが推察される。しかしながら、「物品資源の節約」「コミュニケーション」などのように、担当利用者の日常生活自立度の違いによって、学生が何を修得するかの違いを生じることが否めない。その前提を受け止めたうえで、たとえば、学生のレディネスの状況や学生が学びたい内容に応じて、日常生活自立度を考慮し担当利用者を選定すること、あるいは、実習施設の特性に応じて学生を配置することは学習効果の向上に有益であると考えられる。また、本研究の知見を活かし、モデルコアカリキュラムの修得状況の不足している内容については、実習以前の授業で重点的に教示していくことがモデルコアカリキュラムの充足につながると推察される。

5. 本研究の限界と課題

本研究の限界は、看護系大学の一大学を対象とし、学生の実習レポートから看護実践能力の修得状況を検討した事例研究であることから、本研究の結果を一般化するには検討の余地がある。また、本研究では、計量テキスト分析（接合アプローチ）を活用し、コーディングルールを共同研究者間で作成した。今後、同じコーディングルールを用いた分析を行うことにより、学年間での修得状況が把握でき、比較検討することで、モデルコアカリキュラムの到達度評価に貢献することが期待される。

6. おわりに

本研究では、在宅看護実習の学修概念を抽出し、モデルコアカリキュラムとの照合により、看護実践能力の修得状況を検討した結果、以下の2点が明らかになった。

- 1) 得られた学修概念は、モデルコアカリキュラムの視座を捉えていた。しかし、地域包括ケアの総合的理解、経時的なアセスメント、チームの一員としてケアに参画することは困難であったため、学生が包括的に捉えられるよう、既習の基礎知識と関連付けながら繰り返し教授していくことや、実習環境の検討も必要となるだろう。

2) 担当利用者の日常生活自立度が低い場合は「物品資源の節約」、日常生活自立度が高い場合は「コミュニケーション」について多く言及していたことが示唆された。その一方で、在宅看護の役割として必要不可欠な「多職種との連携」「利用者への寄り添い」「家族の介護力」「家族の不安・負担の軽減」「時間的な制約」「アセスメント」「病棟と在宅の違い」「ニーズ」の概念には差が見られなかった。このことより、訪問看護ステーションの実習施設において、学生が担当する利用者の日常生活自立度の違いは、在宅看護の修得状況に過大な影響を及ぼしていないことが推察される。

謝辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆様、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

文献

- 厚生労働省:地域包括ケアシステム, http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/ (2018年6月15日参照)
- 日本訪問看護財団:訪問看護アクションプラン2025—2025年を目指した訪問看護, <http://www.jvnf.or.jp/2017/actionplan2025.pdf> (2018年6月15日参照)
- 長江弘子:第12章 在宅看護の教育はどのように変化したか, 新版在宅看護論 (木下由美子編著), 医歯薬出版株式会社, 東京, 2016, 265-270
- 清水準一:首都大学東京における在宅看護学実習の目標と進め方—現状と今後の課題, 日本在宅看護学会誌, 3 (2): 25-29, 2015
- 厚生労働省:看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html> (2017年11月1日参照)
- 任和子:看護専門職を育てる場をつくる—看護管理実習の意義—, 38 (10), 臨床看護, へるす出版, 東京, 2012, 1330-1333
- 任和子:特集 これからの医療を見据えた看護基礎教育変革の方向, 私が考える看護基礎教育変革の方向—これからの看護実習の在り方について—, 42 (8), 看護展望, メヂカルフレンド社, 東京, 2017, 700-702
- 御田村相模, 内藤恭子:在宅看護実習における学生のアセスメント力支援の方法を検討する—日常生活援助技術経験率から—, 46, 日本看護学会論文集 看護教育, 日本看護協会出版会, 東京, 2016, 27-30
- 樋口キエ子:在宅看護論実習教育内容・指導体制の検討にむけてその1—訪問内容・看護婦に求められるもの・実習で良かった点・困難点から—, 足利短期大学研究紀要, 22: 21-31, 2002
- 文部科学省:看護学教育モデル・コア・カリキュラム—「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標—, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afiedfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (2018年2月1日参照)
- 吾郷ゆかり, 祝原あゆみ, 栗谷とし子, 加藤真紀:在宅看護実習の学びの校正, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 5: 101-109, 2011
- 野村政子, 柿沼直美, 常名陽子, 照沼正子:在宅看護論実習における学生の学び—実習目標との関連から—, 46, 日本看護学会論文集 在宅看護, 日本看護協会出版会, 東京, 2016, 111-114
- 山村江美子, 田中悠美, 稲垣優子, 酒井昌子:在宅看護論実習における学び—対象の理解と在宅看護実践の特性に焦点をあてて—, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 23: 41-51, 2015
- 星野崇宏, 荘島宏二郎, 樋口耕一, 富田英司:教育心理学研究のためのテキストデータの計量分析, 教育心理学年報, 55 (0): 313-321, 2016
- 樋口耕一:テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—, 理論と方法, 19 (1): 101-115, 2004
- 樋口耕一:社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—, ナカニシヤ出版, 京都, 2014
- Iker, H. P., & Harway, N. I: A computer systems approach toward the recognition and analysis of content, 381-405, *The analysis of communication content: Developments in scientific theories and computer techniques*,

- 1969
18. Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H: *The measurement of meaning*, University of Illinois Press, 1957
19. 樋口耕一：現代における全国紙の内容分析の有効性—社会意識の探索はどこまで可能か—, 行動計量学, 38 (1) : 1-12, 2011